

「オリオン座」を読む

——自己探求の旅——

加茂映子

A Reading of "Orion"
——Seeking What I am——

Eiko KAMO

ABSTRACT: This report treats "Orion" written by Adrienne Rich, one of the poems in her fifth book, *Leaflets: Poems 1965-1968*.

Through her early days, the constellation, Orion, god of hunting, strength and beauty in a Greek myth was an object of veneration to the poet, though far beyond her reach, at that time.

Years later, however, Orion appears to her deprived of its old power and brightness. This change of her attitude toward Orion might be explained by the fact that Rich has held him as a male in less respect than before. But in turn she begins to find other precious qualities in Orion, that is, patience, resolution to fight against his loneliness.

Rich comes to project herself as a poet into Orion which is the ideal image of her own self. Now she feels Orion much closer to her.

Orion is a male god settled as a constellation in the sky. Rich cannot find something, other than Orion, on which to project herself. This cannot be helped, for the ideal image of woman that Rich wants to create cannot be found in the long tradition, which has been established by male. Thus, no female image that exists in history or myth can meet what she is seeking as an ideal image of herself.

Rich looks through the unconscious trying to find the true nature of human beings. She believes in some male elements in women, while some female elements in men, and she recognizes all human beings are lonesome. For reasons above mentioned she chose Orion and projected herself on him.

「オリオン座」(“Orion”)はエイドリアン・リッチ (Adrienne Rich, 1929-) の第5番目の詩集『ちらし広告』(Leaflets: Poems 1965-1968)の冒頭に置かれ、1965年に書かれた。この詩においてリッチは30歳代の半ばに達した自己を洞察し、分析している。自己についての意識は早くから目覚め、また激しいものであった。同年代の多くの女性は気楽に日々を過ごしているように思われたが、彼女にはそれが理解できなかった。“To be like other women” had been a problem for me. From the age of thirteen or fourteen, I had felt I was only acting the part of a feminine creature. と彼女は回想している¹⁾。

自己についての意識は、当然のことながら他者との比較や相違の認識を伴うものである。リッチにとって他者とは自己以外の全てを意味するものであったけれども、その他者の中でも女性としての自己と対峙することの多い男性の存在はきわめて重要な意味を持つと考えられた。彼女にとってかけがえのない自己一女性として、詩人として一他者に対する態度の変化は、次の彼女自身の言葉によく表現されている。I had thought I was choosing a full life: the life available to most men, in which sexuality, work, and parenthood could coexist...[But] I wanted [at 29], more than anything, the one thing of which there was never enough: time to think, time to write²⁾。

この引用の前半に述べられているように、リッチは女、詩人そして母としての役割を担うことを十全の人生と考え、自分もこのような人生を選び取ったつもりであった。というのも大抵の男性が担っていると彼女には思われた男、仕事そして父としての役割の女性版を彼女もまた実践しようと考えたからであった。だが、引用の後半に述べられている詩作への強い願望は、29歳になり、3児の母となってはじめて実感されたのであった。男性と同じようにするということが如何にむずかしいことであるか、リッチがそれを知らないはずはなかった。「大体、そのようなことを望むのが間違いだ」という世間の声さえ、しばしば彼女の耳に聞えてきたにちがいない。「義理の娘のスナップショット」(“Snapshots of a Daughter-in-Law”)の第9節にはサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) の言葉に言及した Not that it is done well, but/that it is done at all?³⁾ (出来ばえなんかじゃないんだ、一体、女に出来るのか)の行が見られる。ジョンソンはボズウェル (James Boswell) に対して女性が説教壇に立つことについて、かりにも女性にそんなことができるとは驚異であると述べ⁴⁾、彼の女性への認識の低さを露呈した。また、敬愛する父を思う時、リッチはいつも I know you better than you know yourself⁵⁾ (私はあなたを知っている、あなたが自身を知るよりよく)のつぶやきが聞えてくるのであった。

社会のくだす女性に対するこの宣告を彼女は意識から拭い去ることはできない。彼女が詩作の初期において抑制のきいた表現、技巧の冴え、知的明析を真の目標とみなし、形式上の秩序を作り出すことに満足を覚えたのも無理からぬことであった⁶⁾。自己に対する意識が早くから目覚めていたとはいえ、彼女を詩人として認めたのは彼女自身ではなかった。彼女はただ社会の裁可を待たねばならなかった。次の言葉は当時の社会と女性詩人としての彼女との関係をよく表している。I had been taught that poetry should be “universal”, which meant, of non-female⁷⁾。

男性と同等の役割を担うつもりで踏み出した人生ではあったが、詩そのものが non-female なのとされ、それこそが universal とみなされるのならば、詩人として世間に出るためには女性としての性を抑圧せねばならなかった。それゆえに「それまで女性としての自己を表明することをなるべく避けてきた⁸⁾」リッチは、しかしながら、1958年から1960年にかけて書かれた “Snapshots of a Daughter-in-Law” において、はっきりと女性と社会の関係、女性の位置づけの問題に手をつけるようになった。この問題は自ずと意識下の自己を探求する始まりともなった。これは技巧の冴えや知的明析などを詩の真の目標としていたリッチにとって、大きな飛躍といえよう。

この自己探求の旅は決して受身的なものではない。詩作は想像力を必要とする。自由な心の働きが必要である。それは従来、社会が女性に求めた従順さとはおよそ異質の精神状態である。この姿勢を貫くためには世間の非難に屈してはならず、また自己にはこの上なく厳しく対処しなければならない。リッチは社会が作り上げた今までの女性像とはちがった新しい女性像を描き出そうとする。“Snapshots of a Daughter-in-Law”の結末部分において、リッチは次のように描いている。

She's long about her coming, who must be
more merciless to herself than history.
Her mind full to the wind, I see her plunge
breasted and glancing through the currents,
taking the light upon her
at least as beautiful as any boy
or helicopter,⁹⁾

その飛来が待たれる、歴史が無情なの
にもまして自らに無情にならねば
ならないのだ。風に立ち向う気概、
女は突進する、気流の中を敢然と
閃き進む、光を身に浴びた
その美しさは、少年の、あるいは
ヘリコプターのように、いやもっと美しい。

リッチは詩作における精神の活動のさまをグライダーのパイロットのように思考の流れの中を飛翔することであると述べている¹⁰⁾。少年はもとより、ヘリコプターやグライダーも従来の考え方からすれば男性的なイメージであることは否定できない。そしてこの男性像の借用という手法は、以下において考察する“Orion”にも見られる。このことはどのように解釈されるであろうか。“Orion”を読みながら彼女の女性としてまた詩人としての歩みと認識について自分なりに解釈を施したいと思う。

ORION

Far back when I went zig-zagging
through tamarack pastures
you were my genius, you
my cast-iron Viking, my helmed
lion-heart king in prison.
Years later now you're young

my fierce half-brother, staring
down from that simplified west
your breast open, your belt dragged down
by an oldfashioned thing, a sword

the last bravado you won't give over
though it weighs you down as you stride

and the stars in it are dim
and maybe have stopped burning.
But you burn, and I know it ;
as I throw back my head to take you in
an old transfusion happens again :
divine astronomy is nothing to it.

Indoors I bruise and blunder
break faith, leave ill enough
alone, a dead child born in the dark.
Night cracks up over the chimney,
pieces of time, frozen geodes
come showering down in the grate.

A man reaches behind my eyes
and finds them empty
a woman's head turns away
from my head in the mirror
children are dying my death
and eating crumbs of my life.

Pity is not your forte.
Calmly you ache up there
pinned aloft in your crow's nest,
my speechless pirate!
You take it all for granted
and when I look you back

it's with a starlike eye
shooting its cold and egotistical spear
where it can do least damage.
Breathe deep! No hurt, no pardon
out here in the cold with you
you with your back to the wall¹⁾.

オリオン座

ずっと以前、からまつの草地を
ジグザグ形に歩いていった時

あなたは私の守護神、あなたは
不屈のヴァイキング、獄屋に
囚われた、私の獅子心王だった。
年月を経た今、あなたは若々しく

あなたは闘志に満ちた、私の異母兄
飾りのないあの西空から私を見下ろす
胸を張り、帯は古風な代物のために
ひと振りの剣のために引き下げられている
それはあなたが引き渡したから
最後のこけおどし、歩くたびに重みがかかり

嵌め込まれた星飾りは色褪せ
いや多分燃えつきたのかもしれない。
しかしあなたは燃えている、私にはわかるのだ
頭をあげてあなたを認めようとする時
かつての浸透作用が今新たに起るのを感じる。
これに比べれば聖なる天文学など無に等しい。

室内では私は傷だらけ、へまばかりやらかし
確固たる信念はなく、よけいなことに
手を出す、まるで死産児が闇に捨てられたよう。
煙突の上方で、夜が碎ける、そして
時のかけらとなり、凍った晶洞石は
火格子に降り注ぐ。

背後に男が近づき
私の目のうつろさに気づく
鏡に映る女の顔は
私の顔を避ける
子供たちは私もろとも滅びてゆく
私の生をひと口ひと口かじりながら。

哀れみはあなたの得手ではない。
空のかなたであなたは静かに痛みに耐える
檣頭見張座に高々と据えつけられて、
私の物言わぬ海賊よ！
あなたは一切を受け入れてしまう
そして私があなたを見返す時

私の眼差しは星の光に似て

その冷たく利己的な槍を
最も損害の少ない所へ射通す。
深く息を吸い込むのだ！ あなたには
傷も、また許しもないのだ
この冷たさのただ中で窮境に立つあなたには。

オリオン座は北半球の冬空にひとときわ光を放ち、三つ星と、これに対して左右対称の位置に赤いベデルギウスと青白いリゲルと呼ばれる星がある。オリオンはギリシャ神話では美と力を備えた巨人の狩人であり、月と狩猟の女神アルテミスの矢にたおれ、空に置かれたといわれている。そこで彼は三つ星を嵌め込まれた帯と、剣を身につけた戦士となっている。

6行7節から成るこの詩の第1節のみが過去形で語られ、後は全て現在の「私」とオリオン座との関係について語られている。行の多少だけからは断定しがたいけれども、過去の「私」のオリオン座への態度が単純なものであったのに引き替え、現在のそれは6節の詩行を必要とするほどに複雑なものなのではないかと推測される。

過去の「私」にとってオリオン座は「守護神」、「不屈のヴァイキング」、獄屋に入れられ、国政の舵を奪われたとはいえ「獅子心王」とうたわれたリチャード1世であった。Viking や helmed など海に関連した語が用いられ（後にも同様の語はみられる）、天上のオリオン座を表すには適当でないように思われるかもしれない。しかしオリオンはアポロの計略により、さそりに追われて海中へ逃げ去り、アルテミスが誤って放った矢にたおれたと言われており、空に据えられたオリオンがなおさそりの追跡を受けて動けないでいるという説を受け入れるならば、オリオンが helmed と形容されていることもうなずける。

オリオンは海神ポセイドンとエウリュアレの間に生まれたとされているが、一説には大地から生まれたとされ、その場合、人間世界の「私」との何らかの縁をそこに見ることもできよう。

からまつ草地を遊び気分でジグザグ形に道を取り、家路をたどった幼い頃の「私」には、空に輝くオリオン座はただ賛美の対象として映ったにちがいない。

次の2節は現在の「私」の目に映るオリオン座のさまを描いている。「私」のオリオン座への態度がそれを若々しいものと「私」に思わせるのであるが Years later と young の一見矛盾した結びつきが興味深い。オリオンは今「私」に身近な half-brother となった。fierce, staring や simplified はオリオンの放つ激しさと緊迫感を表し、それはオリオンを見つめる「私」にも伝えられる。オリオンの若々しさと、第2節3行以下で描かれたその外観がかつての光彩を失い、何か尾羽打ち枯らしたような感じを与えることとの、一見矛盾した結びつきもまた興味深い。

ひと振りの剣は帯を引き下げて見苦しい。その帯の星の光も失せかけている。これらはかつての男性の威信の遺物であり、それらが光を失いつつあることはありのままの男性の姿が表われ始めたことを意味し「私」が「あなた」とよりよい関係が持てるようになるかもしれないことを示している。そして、「私」も積極的に「あなた」を受け入れようとするのである。幼少時に何の躊躇もなく傾倒したのは違った意味での「あなた」への親愛の情を抱くのである。ギリシャ神話の故事とは比較にならない重要な関係が「私」とオリオンとの間に生ずることになる。

第4および第5節において、「私」の思いは自己へと向けられる。「私」は苦境に置かれている。望ましくない方向へ進んでいる社会に対する不安、人との関係のむずかしさ、詩を書けない悩みなどが「私」を苦しめる。

リッチはこれまでの詩において、室内を外の世界と対立させていくつかの意味を与えてきた。第

1に室内は外界(社会)のもたらす不安や脅威からの避難所である。

たとえば最も初期の詩である「暴風警報」("Storm Warnings")においては、あらゆるすき間から室内へ入りこもうとする無気味な、陰険な嵐への怯えがみられる。

I draw the curtains as the sky goes black
And set a match to candles sheathed in glass
Against the keyhole draught, the insistent whine
Of weather through the unsealed aperture¹²⁾.

そして、カーテンを引き、ひたすら嵐の過ぎ去るのを待つより他に手だてがない。

第2に室内は自己の意識の世界を表わしている。「一步退って」("Stepping Backward")においては人の心は私室やその窓にたとえられる。心は他人と分かつことはできない。たとえ同じ対象を見ても、その認識は見る者に固有である。人の私室に足をふみ入れることはためられる。来客があると、部屋に出ていた何やかやは戸棚にしまい込まれて、平生の部屋とはすっかり様子が変わってしまう。

you and I

Still look from separate windows every morning
Upon the same white daylight in the square.

And when we come into each other's rooms
Once in awhile, encumbered and self-conscious,
We hover awkwardly about the threshold
And usually regret the visit later……
Most of us shut too quickly into cupboards
The margin-scribbled books, the dried geranium,
The penny horoscope, letters never mailed.
The door may open, but the room is altered;
Not the same room we look from night and day¹³⁾.

第3に、というよりもこれは第1の場合の自己と外界との関係が変化したものであるが、室内は自己を守ってくれるというよりもむしろ外界と隔絶されているために「私」の不安を強める場所となる。先に言及した“After Dark”においては「私」の室外に対する態度には、“Storm Warnings”の場合と比較して明らかな進展がみられる。

A window crashes

suddenly down. I go to the woodbox
and take a stick of kindling
to prop the sash again.
I grow protective toward the world¹⁴⁾.

この引用の直ぐ前で、「私」にとって父は外界とのたたかひにおける最大の相手であったことがほのめかされ、その父の死から受けた衝撃は *the sashcords of the world fly loose* (世界に開く上げ下げ窓の吊り綱が切れる) と表現されている。室内は時には「私」を外界から守ってくれるけれども、「私」はもはや室内に居れば安心だという境地を脱した。むしろ「私」は進んで外界とのつながりを持つとするのである。

“Orion” 第4節に戻ることにしよう。室内で「私」は自分の失敗にじれ、自信を失い、心が落ち着かない。それにしても「私」がこれほどまでに自分をみじめな空しいものとみなさなければならなかったのは何故であろうか。1950年代から60年代にかけて、南部での人種差別反対の坐り込みや行進、キューバに対する海上封鎖作戦への批判、ベトナム戦争反対の運動の高まりなどによって世間は今までになく騒ぎ立っていた。リッチはこれらの出来事を挙げた後、それらが彼女に与えた影響について次のように述べている。I needed desperately to think for myself—about pacifism and dissent and violence, about poetry and society and about my own relationship to all these things……I wrote in a notebook about this time: Paralysed by the sense that there exists a mesh of relationships, yet I grope in and out among these dark webs¹⁵。

Night cracks 以下の3行において、夜は“Storm Warnings”の場合のように室内へはいり込もうとする。実際、夜は砕け、時の破片となり、「私」の居る室内と外界を結ぶ唯一の通路である煙突を通してやってくる。「私」は何らかの変化を受けるかもしれない。これを機に「私」の心は外へ向かうことになるかもしれない。この詩において室内は意識の内側を意味すると同時に、「私」の不安を増大させる場所ともなるのである。

次の節において第4節での自己探求はさらに深められる。「私」は鏡に映る自分の姿を見る。次々に鏡の面に姿を見せる男や女、子供たちはいずれも「私」の分身と思われる。man も woman もそれぞれ「私」の内にある男性的要素と女性的要素であろう。しかし man も woman も「私」と視線を交すことを避ける。それは「私」の内部でこれらの要素がまだ十分に熟していないことを意味すると考えられる。children はいまだに未熟な自己を指すと考えられる。その未熟さが今の「私」を滅ぼし、かじりとる。しかし、「私」の生をかじっている children もまた「私」の分身であるからには、この children がやがて養分を得て成長するという一縷の望みもなくはないのである。忍耐が実りをもたらす。

第6および第7節において「私」の心はふたたびオリオン座へと向けられる。第6節冒頭の pity は第5節に述べられた「私」の苦境への同情の気持と解することができるけれども、同時に「あなた」への哀れみとも考えられる。なぜなら *Calmly you ache* で始まるその次の2行には、大空の高みに据えられて孤独に耐える「あなた」の苦悩が述べられているからである。第1節の場合のようにここでも海に関連した語 *crow's nest* や *pirate* が用いられているが、それらはまた、今もなお「あなた」が力を失ってはいないことを示している。そのような「あなた」と「私」との感応がこの詩の結末部でついに成就されるのである。「あなた」と「私」は視線を交わし合う。その視線は冷たく、自己本位で、射るように鋭い。

リッチはこの詩の最終節の一、二の表現をゴットフリート・ベン (Gottfried Benn, 1886-1956) のエッセーに示唆されたと述べている。ベンが *Primal Vision* において現代の芸術家への忠告として *Don't lose sight of the cold and egotistical element in your mission…With your back to the wall, careworn and weary, in the gray light of the void, read Job and Jeremiah and keep going*¹⁶。と述べていることから、where it can do least damage とは芸術の領域を意味するものと考えられる。とすれば第7節は詩人としてのあるべき姿と決意とを、孤独で果敢なオリオン座に投

影することによって表明したと考えられるのである。

Breathe deep! はいや増す苦難を乗り越えてゆかねばならない「私」がわれと我が身へ呼びかけた励ましであろう。No hurt 以下の行もまた「私」への呼びかけと考えられる。詩人としての道をゆくことは、傷や赦しを受けたり与えたりするという問題ではないのだ。ただ一切を我が身に引き受けることなのである。

最後の2行において「あなた」と「私」との距離は急激に縮まる。「あなた」は「私」のそばに引き寄せられている。今達成された transfusion はこれまでで最も深くゆるぎないものとなるであろう。

詩“Orion”によってリッチは自己の意識の深みを探り、詩人としての苦悩を述べ、今後のあり方への決意を表明した。すでに幾分か明らかにしてきたつもりであるが、「あなた」と呼ばれるオリオンがいわゆる男性的性格を多分に備えており、しかもそのオリオンにリッチが「私」を投影していることの意味について結論したい。

リッチは女性としてそして詩人としてのあるべきイメージを描き出そうとした。社会が作り上げた望ましい女性のイメージはリッチの意図するものとは一致せず、詩は non-female なものだとする社会が作り出す詩人のイメージもまたリッチのそれとは一致しない。

だが、星座オリオンは幼い頃からリッチの心を強くとらえてきた。そしてオリオンに対する態度はリッチの人生経験の深まりと共に変化し、今では以前よりもはるかに身近なものとなった。

人間は性別に関係なく、究極的に孤独である。男性にもいわゆる女性的性格が潜んでおり、女性にも逆にこのことは当てはまる。以上の事柄がリッチに「オリオン座」を書かせる主な原因となったのではないであろうか。

リッチはこの詩の中で cold and egotistical という言葉を用い、それを自分にあてはめたのは決して偶然ではない、と言っている¹⁷⁾。リッチはこの cold and egotistical を love という言葉と対照的に用いている。ただしこの love は世間によってこれのみが女性の特性かつ長所とされてきた、いわゆる女性らしい愛、母性愛、利他主義的な愛を意味し、この愛は実は社会が女性に押しつけたものなのだ、とリッチは言う。これと対照されるのが男性の特性とされる egotism である。男性が創造、達成、野心へと向ける力はしばしば他者(女性)を犠牲にし、しかも多分に正当化されてきた。リッチはいわゆるこの男性的特質を egotism と名づけている。

リッチが女性として詩人として生きる自分の姿勢を cold and egotistical と呼んだのは love との二者択一を迫られたからであった。リッチはこのように男性らしさや女性らしさが規定されていることに対して再考を促している。また「愛」という言葉の意味と使い方についても再考を要する、と言っている¹⁸⁾。

“Orion”にみられる自己意識の深まりは、彼女が第1詩集以来常に問題にしてきた「他者」とのかかわりについて、今後何らかの変化をもたらすであろうか。常に変化を求めるリッチの第6番目の詩集、彼女の姿勢を象徴するかのようなタイトルのつけられた『変える意志』(*The Will to Change*)においてこの問題がどのように扱われているかを検討することを今後の課題としたい。

文 献

- 1) Adrienne Rich : *Of Woman Born*, p. 25, Norton, New York, 1976.
- 2) Barbara & Albert Gelpi, ed. *Adrienne Rich's Poetry*, p. 96, Norton, New York, 1975.
- 3) *ibid.* p. 15.

- 4) *ibid.* p. 15, fn. An allusion to Samuel Johnson's remark to Boswell: "Sir, a woman's preaching is like a dog's walking on his hinder legs. It is not done well; but you are surprised to find it done at all." (July 31, 1763, *Boswell's Life of Johnson*, ed. George Birkbeck Hill [Oxford, 1934], I, 463).
- 5) *ibid.* p. 28. この箇所については拙稿, 京都大学医療短期大学部紀要第1号 (p. 127-136) 「闇のあとに」―自存について―で言及している。
- 6) *ibid.* p. 89.
- 7) *ibid.* p. 97.
- 8) *ibid.* p. 97.
- 9) *ibid.* p. 15-16.
- 10) *ibid.* p. 96.
- 11) Adrienne Rich: *Leaflets: Poems 1965-1968*, p. 11-12, Norton, New York, 1969.
- 12) Barbara & Albert Gelpi, ed: *Adrienne Rich's Poetry*, op. cit. p. 1.
- 13) Adrienne Rich: *Poems Selected and New, 1950-1974*, p. 9, Norton, New York, 1975.
- 14) Barbara & Albert Gelpi, ed: *Adrienne Rich's Poetry*, op. cit. p. 29.
- 15) *ibid.* p. 96-97.
- 16) *ibid.* p. 36, fn. One or two phrases were suggested by Gottfried Benn's essay "Artists and Old Age" in *Primal Vision*, ed. E. B. Ashton, New Directions [Rich's note], 本文中の引用箇所は上記の p. 206-207.
- 17) *ibid.* p. 97.
- 18) *ibid.* p. 97.